みんなの只見線

「あたりまえの風景が突然消えた日」

只見線地域コーディネーター　酒井（さかい）　治子（はるこ）

みなさん、最近只見線に乗ったのはいつだったか思い出せますか。

もしかしたら、ずいぶん前に乗ったきり、乗っていない人も多いかもしれません。まだ只見線に乗ったことがない人も結構いらっしゃるのかもしれません。

現在只見駅には小出行きが一日三本到着し、会津若松行きの代行バスが一日七本会津川口駅まで行き、会津川口駅からの列車に接続できるよう運行しています。

私は二〇一九年の秋から、只見線の定期列車の中でおもてなしとして観光案内と車内販売を行っています。区間は会津柳津駅と会津川口駅の間で、一日一往復、毎週土日と祝日に乗車しています。乗っていらっしゃる方は観光で訪れる方がほとんどですが、ときどき只見町の人と車内でお会いすることもあります。

この車内販売の仕事は、福島県只見線再開準備室と只見線沿線市町で構成されている「只見線利活用推進協議会」が策定した「只見線利活用推進計画」という計画の下、只見線の観光路線化を推進するための実証事業として実施しています。

なぜ私が現在この仕事をしているのか、少し昔に戻ってお話したいと思います。

二〇一一年夏、只見町の人にとって記憶に新しい新潟・福島豪雨災害が発生してから、今年で十一年がたちます。その当時も只見線は秘境のローカル線として旅行会社のツアーが組まれ、大手の新聞でも紹介されるなどしていました。また二〇〇一年には只見線にSLが復活し、年に数回の運行日には、車で追いかけていくつもの撮影場所でベストショットを撮影するための「追っかけ」の車で渋滞するようなこともありました。

SLが走る際、終点であり始点だった只見駅では、SL運行に合わせ、ちびっ子駅長が実際の駅長と同じ制服を着て乗客の皆さんをお出迎えしてくれました。また、運行に必要や石炭や水を補給するための作業が行われ、会津若松方面へ方向転換するために、転車台を動かす作業を体験できるSLの転車作業体験が行われ、一大イベントとしてにぎわっていました。

水害以前の平成時代は、観光に関わる人たちにとって只見線は「SLが来ればお祭り」のような存在でしたが、奥会津で暮らすほとんどの人にとっては走っていて当たり前、空気を運んでいる時代遅れのローカル線というイメージがあったように思います。

私にとって十一年前の二〇一一年七月二十三日、二十四日、只見線全通四十周年を記念する特別列車が只見駅に来た日のことは忘れられません。次男が生まれたばかりでまだ産屋が明けない中、只見線の記念日をお祝いしているムードに包まれた只見駅に行ったときに、全通四十年という歴史を感じた瞬間でした。

その一週間後、只見町だけでなく只見川沿いの町村が被害を受けた水害により、只見線は橋梁や線路の流失など大きな被害を受け、当たり前に走ってくると思っていた列車が只見駅から姿を消し、駅の窓口が閉じられました。只見駅に再び列車が帰ってきたのは、一年二か月後の二〇一二年十月一日のことでした。

（次号に続く）